

興福寺 北円堂

春期・秋期のみ期間限定開扉



興福寺は、藤原氏の氏寺として和銅3年(710)の平城遷都とともに建立。五重塔、三重塔、東金堂、南円堂、北円堂などの建造物、阿修羅像や銅造仏頭、無著・世親菩薩像など数多くの国宝・重要文化財が現在に伝わる。また、《天平の文化空間の再構成》を合言葉に、境内の史跡整備事業を展開しており、享保2年(1717)の焼失以降、300年を経て中金堂が再建、2018年に落慶。

法相宗大本山 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48

Tel (0742) 22-7755

<http://www.kohfukuji.com>

国宝
木心乾漆造
四天王立像
像高 1347~1377cm
彫眼 彩色
延暦10年(791)・平安時代



The Four Heavenly Kings (Heian Period)

木屎漆を使った技法とユーモラスな表現

増長天像と多聞天像の台座裏の墨書から、延暦10年(791)に制作、もと大安寺(奈良市)に伝来した四天王立像であり、後に興福寺に移り、弘安8年(1285)に経玄が修復している。木肌の上に厚く木屎漆(木屑と漆を混ぜたもの)を盛り上げて整形する

木心乾漆造の作例。高さは140センチメートルに満たないが下半身は安定し、持国天や多聞天では筋骨隆々としている。持国天の瞳のユーモラスな表情など、全体を通して誇張的な表現に特色がある。

* 持国天(1)・増長天(2)・広目天(3)・多聞天(4)

国宝

木造

無著菩薩立像

世親菩薩立像

像高 無著菩薩立像・194.7cm
世親菩薩立像・191.6cm
運慶作 寄木造 彩色 玉眼
建暦2年(1212)頃・鎌倉時代



Seshin Bosatsu (Kamakura Period)

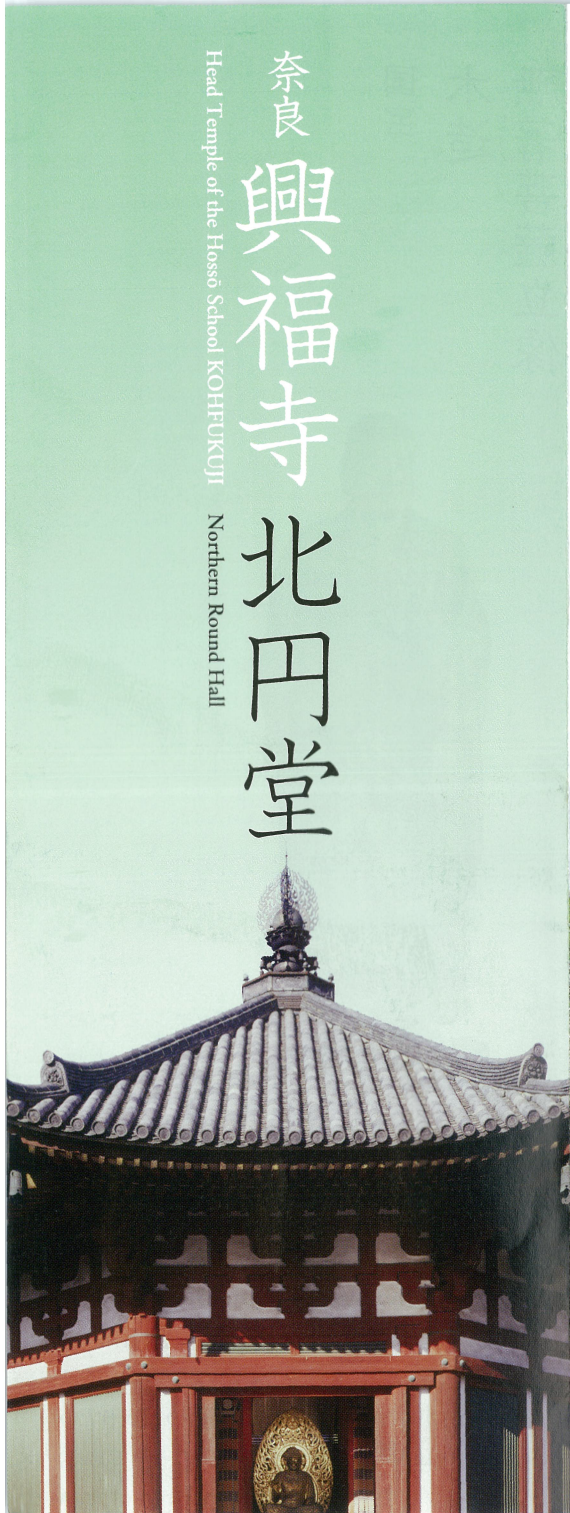


Mujaku Bosatsu (Kamakura Period)

日本肖像彫刻史上の最高傑作

無著と世親は4~5世紀頃の北インドの兄弟僧侶。法相教学の祖師として尊崇され、人種や時代を超えた理想的な仏教の求道者の姿として運慶が追求・表現した。二体一組で対照的な表現を示しており、老年の無著は裂で包んだ箱を抱いて優しく人々を見守っ

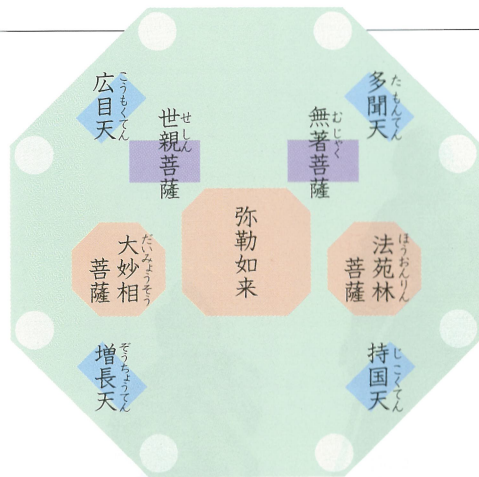
ている。一方、弟の世親は壮年で遠方を見つめる意志の強い姿で表される。共に体軀は量感に富んでおり、玉眼(仏像の眼に水晶などを嵌め込む技法)による目の表情がいきいきとしている。運慶の代表作というだけでなく日本彫刻を代表する名宝の一つである。



国宝
北円堂

八角円堂 本瓦葺
創建・養老5年(721)
奈良時代
再建・承元4年(1210)
鎌倉時代

八角円堂は廟堂としての意味を持つ。北円堂は養老4年(720)に亡くなった藤原不比等の菩提のために、元明太上天皇と元正天皇が建立を発願し、長屋王に命じて一周忌にあたる翌年の8月3日に完成した。その後、承元4年(1049)の火災で焼失し、治承4年(1180)の平重衡による南都焼討でも失われ、承元4年(1210)に復興。嘉暦2年(1327)と享保2年(1717)の大火の時には難を逃れ、現在、興福寺伽藍に残る堂宇の中では最も古い。



諸尊配置図



PHOTO：飛鳥園

国宝
木造
弥勒如来坐像

像高141.9cm
運慶作 寄木造 彫眼 漆箔
建暦2年(1212)頃・鎌倉時代



Miroku Nyorai (Kamakura Period)

運慶一門の円熟の境地

北円堂諸像は、治承4年(1180)の南都焼討後に運慶一門によって再興された。本尊である弥勒如来坐像は、弥勒菩薩が56億7千万年後に成仏した姿である。像内には建暦2年(1212)の年号を記す願文などが納入されており、また本尊台座内枠には

源慶・静慶・運賀・運助・運覚・湛慶・康弁・慶運・康勝ら慶派仏師の名が墨書されるが、彼らを統率したのが巨匠運慶であり、運慶晩年の名作として知られる。脇侍に法苑林菩薩坐像と大妙相菩薩坐像(室町時代・桧材・寄木造・漆箔・玉眼)を従える。